

る廣い意味の目錄學の立場である。中國の歴史學の著述をば、先ずその編纂の體裁を吟味することによつて、著作目的をたずね、その史書の著者のよつて立つ歴史觀を明らかにし、これと類似の史觀をもつ史書と連關して、これらを生んだ學派の發生、發展、衰滅の過程をたどらうとされたものであつた。博士のいわば史書の發生史觀とでもいふべき立場は、第一章の史の起源に始まり、第二章周代に於ける史官の發達、第三章の起録の起源を通じ、第四章の史書の淵源に至る諸章に於いてとくに鮮かに現われ、またそこに於いて王國維の如きと手を組んで、甲骨文金文のような新出の史料を利用して、從來まつたく閑却されていた中國に於ける歴史の起源、その發生の過程を闡明したものとしてみつとも成果を擧げてゐる。

第二に、内藤博士のこの史學は單に中國の史書の學派分け、客觀的な史書の目錄學に止るものではなく、さらに内藤博士の自らの史觀史學の方法と技術とを作

り上げるため、いわば内藤博士の支那通史の前提としての支那史學史論の意味を荷うものである。この支那史學史は言葉をかえて云うと、博士が一生のうちに通讀、熟讀して消化され、所謂内藤史學の發分となつた史書について、その自己の史學に於いてもつ意義と價值とを示されたものに外ならない。その意味に於いてこれは内藤史學の入門あるとともに、支那史學の最高の入門書であると稱しても差しつかえない。いやしくも支那史學に志すものは、この書をひもとくことによつて、自己の専門の領域において、如何なる史學が如何なる價值をもち、如何に讀むべきかを知ることができからである。神田、内藤兩氏の綿密な校定によつて、われわれ後學が聞かんとして聞くを得なかつた故博士の講義を成書として讀むことができることになつたのは、ひとり博士の門弟たちだけでなく、東洋史學界への天來の福音である。兩氏の努力に深甚の感謝の意を表したい。(昭和二十四年五月弘文堂刊A・5版六五六頁 七頁)

圓) — 貝塚茂樹 —

飯塚浩二著 人文地理學說史

飯塚教授の著作『人文地理學說史』は人文地理學が「方法論として如何なる立場をとることが出來、またとらざるを得ないかを、この學問の發達史そのもの、中から確かめようとした」ものであつて常々着實な學說史的反省と方法論的な基礎づけとを忘却し易いわれわれに對しては少からぬ示唆を與えるものである。殊にこの著の明瞭な特色である、個々の地理學說をその各々が成立した時代思潮の中において見ると云う方向は、學史を從來の如き地理發見史、或いは徒らに混亂した羅列的な發達史の束縛から解放するものとして迎えるべきものであろう。

この著は、古代から近代の地理學・フンボルト及びリッターに至るまでを概観した一篇「地理學發達史」から始まり第二篇「地理學史の諸問題」及び第三篇「世界史と地理學」第四篇「ゲオポリテイ

クの基本的性格」より成つてゐる。しかしこゝでは紙幅の関係から、著者自ら本書の根幹をなすとされる第二篇のみについて、いささか梗概を紹介してみたいと思ふ。

氏は問題を先ずヘルダーから展開せられてゐる。それは近代地理學の一つの大きな流れ、即ち、啓蒙思潮への反動に由来するものが彼に於いて明瞭に體系づけられ、「諸民族の部分的考察より人類の綜合觀へ、偶然的な註釋より一つの綜括的な敘述へ、斷片的な世界史より真正の人類史」と、從來地誌的なものと通論的なものとに二分していたこの學問が、統一ある體系にまでまとめ上げられてゐるからであつて、所謂「人文地理學」の發端がこゝに見られてゐるのである。而も既に此處にヘルダーの體系と浪漫主義との間の親密な關聯が考えられ、従つて、これによつて近代地理學の眞の建設者と看做される二人の先達、フンボルトとリッダーの學說も亦この流れの中に於いて位置づけられてゆく。即ち、氏は先ず單

なる自然科学者としてのフンボルトと云う今日の通念を排し、彼に於いては假令それが同じく實證的、經驗的であるにしても、やはりニュートンに見られる如き力學的、機械的な自然觀とは異つて、常に生命の息吹の通つてゐる全一體を忘れることない有機體説的な自然觀が、その基調をなしていることを指摘されると共に、一方常に神學的目的論者たるの故を以つて多くの攻撃に曝されてゐるリッターに對しては、却つて今日は非科學的なりとして斥けられる思想が、當時のこれら先人たちの腦裡にあつて果してゐた大きな役割の故に、之を充分に評價すべきことが注意せられる。つまり兩者の學說はたとえその外見上は著しい差違を示しているにしても、その本來の方法論上の立場の相異、更には自然觀乃至世界觀の相異は餘り多くはなく、何れも十九世紀のドイツを母胎とした浪漫主義の思潮と結びついたものであると云うことが強調せられるのである。

ところが、之に續くラツツェルの地理

學は全く新たな原理、即ち、十九世紀後半を風靡した「Darwinismus」と云う革新的な思想によつて染め上げられたものであつて、有名な『岩と波浪』との比喩が明瞭に示してゐる如く、彼にあつては、人類の運動乃至移動に對して示される地表形態の制約如何と云う問題が純粹に自然科学的に取上げられてゐるのであり、ここに所謂、運動論或いは力學的な人文地理學が成立することになつたのである。而も氏によれば此處に極めて大きな轉換が認められ、之を境としてフンボルトやリッダーの地理學が彼等を支えていた一つの時代と共に「墳墓」に入り之に代つてラツツェルの地理學が登場して來ることが示される。従つて例えば此處に彼の「政治地理學」に見られる國家有機體説も、シュリューターとは見解を異にし、從來の有機體的世界觀とは無縁な社會有機體説の一つとして理解せらるべきであると言ふ注意すべき示唆が與えられることとなるのである。かくの如くにしてラツツェルの地理學がその時代的背

景の下に位置づけられ、やがてはその眼界として彼の體系における「歴史」と「生物地理學的方法」とが吟味せられ乍ら更に來るべき地理學への方法論的な準備がとゞえられてゆく。

以上、極めて簡單であるが然も其處に明瞭に讀みとられるであろう如く、氏の視角は主として個々の地理學説が時代の思潮と接する點に注がれており、かくてカトリシズムとプロテスタンティズム、浪漫主義的有機體説と自然科學的一元論と云う對立は氏によつて教示せられた重要な事實であると云わなくてはならぬ。その意味でまことに「眞理は時代の娘」であろう。然し、云うまでもなくそれぞれの地理學説はそれを授う時代思潮の中にあり乍ら、猶一つにはそれを生んだ個人の内的生命の具現であると共に、一つにはその生命が萬象の姿に注がれるところに織りなされたものである。曾てリッターが『翻譯者なしに對面しよう』としたのも、ラッツェルが『動かし難いもの』と云つたものも同じく自然の姿に外なら

なかつた。従つてこの内から外へと云う地理學が作り出される方向をたどり乍ら先人たちの多角的な世界像の細かな陰翳を照し出してゆることが今後に残された課題であると私は思う。(昭和二十四年二月刊日本評論社A五二二三頁・二〇〇圖) — 岩田慶治 —

清水三男著

中世莊園の基礎構造

日本の中世莊園や村落について優れた業績を果された清水氏の雜誌論文が、こゝうした形にまとめられて出版されたのを私たちは心から喜びたいと思う。この書の出たのを契機に、氏の全業績の批判が望ましいのであるが、氏よりもはるかに後れて歩みはじめた私が、ここでそれを検討するのは不可能に近く、それは他の適當な人によつてなされるべきであろう。この論文集は、種々のものがその中に含まれ年次も内容もかなりの差があるので、その全貌を紹介することは困難であるが、私なりに理解したその中の若干

の論文から、氏の意圖された二三の問題を取り出し、至らぬ感想を述べさせて、ただくことで許してもらおうと思う。

(一) 封建制度——一般に封建社會というものが今日學界の重要な課題となつているのであるが、日本の中世ではまず莊園制度の存在が、注意すべきものであるのはいうまでもない。その莊園の基礎的な構造の解明が、本書の全體を貫く中心課題ともなつていようであるから、こゝうした氏の視角について最初に紹介しておかねばならない。

確かに氏は、早くから莊園文書に沈潜することによつて、十世紀から十四五世紀までの成長期の封建社會を把握しようとされたようである。すなわち法制的な封建制度が成立する社會經濟的な地盤の追求である。氏は「封建時代に就いてその社會の本質を究め」中世社會を發展的にみる「ために「封建制度の研究といえは、武士の間の主従關係が直ちに起される」ことや「封建制度が鎌倉幕府の建設に始まるという説」に疑問をもたれ